震災からの復旧・復興に向けた地域の動き

高齢者世帯の見守り

リアルマック

個別訪問の移動販売「カーゴマルシェ」を倉吉市内で行っている団体が、販売を通じて被災地域の高齢者世帯の見守りや依頼された家屋での小修繕、屋根のブルーシート張りを行いました。

地域を元気に

三八市実行委員会

10月23日に予定していた鬼嫁コンテストなどは、地震により中止となったが、「恒例の抽選会などを楽しみにしている人がいる」、「地震直後で癒やしが必要ではないか」との思いで、10月28日に三八市を開催して地域を元気づけました。

とっとりの元気づくりプロジェクト中部チーム

県中部の地域づくり団体等のネットワーク組織が、鳥取県中部地震の復興支援に取り組んでいるNPO等の活動を支援するため、とっとり県民活動活性化センターの運営するクラウドファンディングにより支援金を募集しました。

NPO法人未来

地震発生から約7か月後に「とっとりはげんきです」をテーマに、被害の大きかった地域を巡るコースの設定、応援メッセージコーナー、被災当時の写真パネルを設置するなどの中部地震復興記念ウォークを開催しました。

みんなで「竹とうろう」を灯そうプロジェクト

地震から1年を迎えるにあたり、これまでの復興支援に対する感謝と、震災を振り返り、日々の暮らしの中で平穏に過ごせる「ありがたさ」や「命の大切さ」について分かち合う機会として、県中部の各地域で「竹とうろう」作りのワークショップと点灯イベントを行いました。

専門性を活かした支援

日野ボランティアネットワーク

鳥取県西部地震の経験を踏まえた専門性を活かし、職員が地震発生直後から倉吉市内に長期滞在し、災害ボランティアセンターの運営支援を行いました。

子どもたちを笑顔に

NPO法人鳥の劇場

小学生の震災の不安やストレス解消を目的に、劇団員が、中部の小学校で演劇ゲームなどを行いました。

NPO法人こども未来ネットワーク

被災した子どもたち（主に未就園児）を対象に、県外から劇団を招へいし、人形劇などの舞台公演を開催しました。

NPO法人あゆみ

給食センターの被災により学校給食が提供できない学校（小学校13校、中学校5校）を11月4日～17日の10日間、キッチンカーで訪問し、あたたかい給食（ハンバーグカレーとフレッシュサラダ、約4200食）を提供しました。

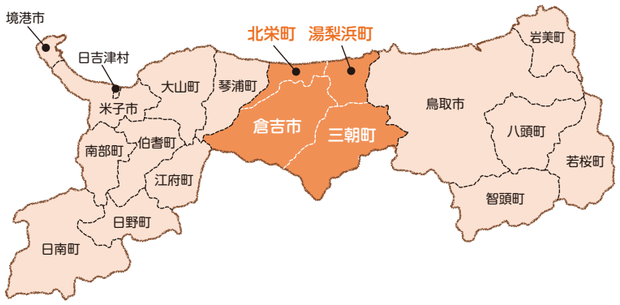
これからに備えて

上北条地区

震災後の防災訓練として、地区内の10の自治会長が通学路を点検し、集約した情報を基に学校が迂回路を検討・安全マップに記入する等、児童を無事に保護者へ引き渡すまでの訓練を、地域と小学校が連携して実施しました。また、小学校区内の全ての自治会が連携して、互いに協力し合う組織づくりを進めています。

生田自治公民館

地震発生時、消防団員等支援する側の人が殆ど仕事で町内にいなかった教訓から、平日の日中に町内にいる人を中心とした防災協力員の仕組みを新たに立ち上げ、自主防災組織を補完・強化する取組を進めています。



鳥取県中部地震の概要

- 発生日時：平成28年10月21日14時07分
- 震源：鳥取県中部 ●マグニチュード：6.6 ●震源の深さ：11km

【各地の震度（鳥取県関係）】

震度6弱…倉吉市、湯梨浜町、北栄町
震度5強…鳥取市、三朝町
震度5弱…琴浦町、日吉津村

※瞬間的な揺れの強さを示す加速度は1,494ガルと、熊本地震の1,362ガルより大きく、阪神・淡路大震災の818ガルよりはるかに大きな地震。

発行／鳥取県元気づくり総本部元気づくり推進局参画協働課
〒680-8570 鳥取市東町一丁目220番地　TEL（0857）26-7248　FAX（0857）26-8196
協力／学校法人藤田学院 鳥取看護大学・鳥取短期大学

鳥取県中部地震からの復興

とっとりのキズナ とっとりのチカラ

鳥取には「人のあたたかさ」があります

平成28年10月21日午後2時7分、
鳥取県中部を震源とするマグニチュード6.6の地震が発生しました。

この地震では、県中部を中心として大きな被害を受けましたが、
地域住民が支え合いながら避難や避難所運営を行うなど、震災からの復旧・復興に向けて
「とっとり」ならではの地域のチカラや人の絆が見られました。

地震から1年を迎えるにあたり、語り手と聞き手の対話を通じて、語り手の体験や
心情を言葉で紡ぎだす「聞き書き」によって集めた被災者の声の中から、
支え合いながら復旧に向けて取り組む様子など、
とっとりの人のあたたかさを紹介します。

廣田 綺羅々さん
（20代、大学生）

ボランティアとして、地区公民館の片付けに参加

こんな地域、いいな。

自分たちも地域の人に向けて何かできんかなって思って。それで、今度は「くらすけくん」を作って、のぼり旗みたいにして、言葉をつけて持って行きました。公民館に来られた方がそれをみて笑顔になれればいいなと思って、みんなでちくちく縫って、頑張って作って持ってって。そしたら館長さんも主事さんも「わーー!」って泣いとられて。「すごい嬉しいー」って言っとんなって。私らそんな、店で売れるような上出来なものを作れたわけじゃないけど、何かしたいっていう気持ちが伝わったんかな、ほっとしてもらえたんかな、と思って、みんなで「あーよかったなー」って言って。

この地域は、小学生からお年寄りまでが仲良いから、おっきな家族みたいな、親戚かな。他の地域にいる私らから見たら、ほんとに、何だろ、アットホームな感じで、見えないつながりがちゃんとあるように感じる。すごいんです、ほんとに。そういう地域だけえこそ、何かしたい、自分たち自身も何かしたいって思って、それが、今回ボランティアしようって思った原動力だと思います。

わたしたちの チカラ・キズナ

穐山　愛子さん（北栄町、80代）

自宅で被災。農作業場、車庫等に大きな被害を受けた

人とのつながり

余震で建物がまただんだん傾いたんですが。それで自治会長さんに「しんちゃん、大変だよー、昨日より傾いとるー」って言って。そしたら「大変だがな。すぐに何とかせないけん！」って言って、電話してくれてねぇ。それで業者さん連れてきてくれて。柱持って来てくれて、すぐにね。

稲山　敬仁さん（北栄町、60代、農業）

自宅、作業場の倒壊等大きな被害を受けた

仲間の助けで片付け

連れなんかが来てくれてねえ。毎日交代交代で。結構大きい家だけんねえ。この部落の同じくらいの歳の人とか、年配の人とか、若い子とかね。40歳前の人も手伝いにきてくれたし、70歳くらいの人とか、年齢はまちまちでしたね。15人くらい来てくれたかなぁ。有り難いことだわね。ほんにほんに。

加藤　貴子さん（10代、高校生）
日山　芽依さん（10代、高校生）

ボランティア活動に参加した地元の学生

自分たちにできるボランティア

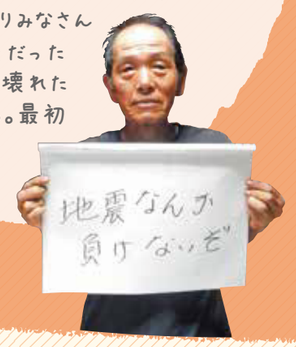
お母さんにも外に行かんほうがいいって、家におるほうが安全だけんって言われとったですけど、友達のボランティアの誘いもあったし、自分たちが割と被害がでなかったけえ、余計ボランティアしたいって思ったかもしれんですね。やってみたら喜んでもらえて、ちょっとは相手にとって何か役に立てたのかなって思えたのは嬉しかったです。

清水　進一さん（北栄町、60代、自治会長）

倒壊した建物による道路の封鎖など、比較的大きな被害を受けた地区の自治会長

集落を巡回して安否確認

現状を見るのに自転車でダーッと部落内をまわりましたね。何軒ぐらいだったかな？　そうだね、だいたい180数軒あったかな。まわると言ってもなかなかまわれないと思うでしょ？まぁでもね、家が込み合ってますから、そんなに時間がかかるもんでもないね。ゆっくりゆっくりみなさんの顔を見ながら「大丈夫だったか？」とか「大変だなぁ、壊れたなぁ」なんて言いながら。最初の2時間ぐらいかな。

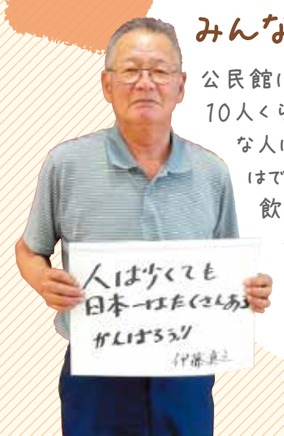


伊藤　真之さん（湯梨浜町、70代、区長）

地震直後に自主避難所を立ち上げて活動

みんなが主役！地域の底力

公民館には15、6人かな、集まったよ。で手伝いに10人くらい来てくれたね。避難している人だって元気な人はおるから、握り飯炊いたり、お茶出したりはできるわね。そのあと町の方から握り飯や飲み水それから毛布の支援があったけど、それより先に握り飯作って配ってたね。誰かがリーダーシップを取って呼びかけた、とかそういうのじゃなくて自然発生だね。



小椋　まみさん（三朝町、50代、商工会事務長）

震災後、地域活性化のための様々なイベントなどを実施

温泉街の温泉施設を無料で開放

でも、「このままじゃいけん」って。「ああ、何かしたい」っていうか、「何か動けんかな」っていう思いがね。1人じゃできないけど、まとまってまだ何かできるぞっていう気持ちがある。このことが一番だったかなあと思いますね。そう、そこに繋げていけたっていうのがね。「かたち」にする仲間、「かたち」にする組織、そういうのがないと、思いだけで終わっちゃうんでしょうね。

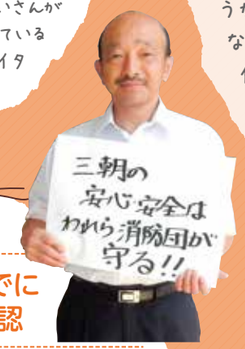
杉中　惇平さん（倉吉市、20代、地域おこし協力隊）

地域おこし協力隊として大阪から倉吉に移住して被災

助け合いの文化が根付いた町

地震の直後、道路にガラスや瓦が散らばっており被害の大きさを感じました。一方、町のいたるところで近隣住民が、テントを持ち寄り仮設の避難所を作ったり、余震が続く中にもかかわらず、おじいさんがはしごで屋根の上にブルーシートを張っているのを目の当たりにして、「この町のバイタリティはすごい！」と思いました。

米原　諒一さん（三朝町、50代、消防団長）



被災当日の夕方までに住民全員の安否を確認

地域の安全を守る

三朝の場合は、消防の班っていうのがね、各集落ごとにだいたい作られておって、それで、だいたいの集落に消防の班があるという、地域密着型の消防団なんです。だから、上からの命令がずっと下に流れていって、それぞれが、それぞれの持ち場をしっかり集約していくという形になっています。

牧田　智子さん（倉吉市、自営業）

国登録有形文化財の銭湯を経営浴室壁面のタイルが大量にはがれ落ちた

恩返しせないけん

なんとかかんとか、皆さんに助けてもらって復興できたです。とりあえず。地域の皆さんもそうだけど、行政がな。すごかったよ。はようにね、動いてくれなってね。うちなんか1カ月だけで再開できたもん。そやから、恩返しせないけんと思ってるわ。

野口智恵子さん（湯梨浜町、50代、自営業）

地震直後に近隣をまわり、避難誘導

小さなコミュニティの絆

独居の方、高齢の方、あの方は大丈夫かな？あの方はどうかな？とか、この時間はご家族はお家にいるのかな？とか、自然にそういうことを頭に浮かべながら避難した。地域のつながりというか、助け合いというかね。そうそう。そういう、日頃からのつながりがあってね。今は、防災マップ、その前に「支え愛マップ」を作ることを考えています。区長さんのシールと、区長さんの次に動ける人のシール、あと、声かけが必要な方のシール、危険個所のシール、という感じで、大きさと色を分けて、シンプルな形で、自分たちが作りやすい、進めやすい形でやっていこうって。

八渡　和仁さん（倉吉市、50代、障がい者施設施設長）

被災した障がい者や職員の安否確認などに奔走

地域のつながり

避難しているときは近所の人も出てきて、同じところに避難されたりしていたので「大丈夫ですか？」みたいなのがありました。そこで立ち止まっている人に「よろしくお願いします」って言ったり、気にはかけてくれてましたね。